



Indian Ocean - South-East Asian Marine Turtle Memorandum of Understanding



Headline

Turtle tagged in China found in Japan

(23 May 2007)

BY TOMOYUKI YAMAMOTO

THE ASAHI SHIMBUN

A sea turtle, saved by a nun from ending up on someone's dinner plate in China, swam all the way to Chichijima in the Ogasawara Islands to nest, according to a local marine conservation organization.

The Ogasawara Marine Center, run by Yokohama-based nonprofit organization Everlasting Nature of Asia, identified the turtle from Chinese characters carved in its shell as having come from Xuwenxian in southern China's Guangdong province.

Manami Yamaguchi, who heads the Ogasawara center, said the sea turtle weighs 120 kilograms and its shell measures 90 centimeters in length.

On its 3,000-kilometer journey to Japan, the sea turtle managed to avoid capture in the Ogasawara area, where the creatures are hunted.

"I'm glad it is safe and sound in Japan," said Shi Wenjing, 82, the nun who saved the sea turtle and released it in Xuwenxian.

The sea turtle came ashore on a Chichijima beach on the evening of May 14. As the beach did not have enough sand to nest, the turtle was brought to the Ogasawara Marine Center where it laid 77 eggs on May 16.

Yamaguchi contacted Ren Minyi, a Chinese acquaintance studying at Hokkaido University, who found via the Internet a report in Chinese media that a nun at a temple in Xuwenxian had saved a sea turtle and returned it to the sea in mid-January.

The report said the nun bought the wayward turtle for 4,500 yuan (about 72,000 yen) just before a merchant was about to sell it to a restaurant to be served up as a delicacy. She marked the location and the date on the back of the turtle before releasing it.

The Asahi Shimbun learned from Ren that the nun is Shi Wenjing. Her temple, Pushanan, has rescued a number of sea turtles.

This time, extra cash donations were needed to make the purchase because the turtle was especially valuable due to its hefty size.

It was kept overnight at the temple and released the following day. It returned to the coast several times before disappearing.

"It is very rare for a sea turtle released from China to make it all the way to the Ogasawara islands," Yamaguchi said. "We plan to keep it at our center for observation and return it to the sea in early August."

According to the Sea Turtle Association of Japan, which is based in Hirakata, Osaka Prefecture, plastic or metal tags are commonly used for sea turtle identification. (IHT/Asahi: May 23, 2007)

For
MANAMI
Phone
for her
Suganuma

Source: <http://www.asahi.com>

Actual link: <http://www.asahi.com/english/Herald-asahi/TKY200705220436.html>

Content from other sources, duly acknowledged as such, has been posted on this website for strictly non-commercial purposes, as a service to IOSEA readers. This content may be governed by local, national, and/or international laws and regulations.

The IOSEA Secretariat takes no responsibility for such content, and readers' use of such content is at their own risk and discretion. Readers are invited to consult the original source and actual link for more information, bearing in mind that over time some of the actual links may no longer be available.

Original URL: http://www.ioseaturtles.org/headline_detail.php?id=619
Printed: 10 June 2007, 10:02 AM, ICT



© IOSEA Marine Turtle MoU Secretariat, c/o UNEP Regional Office for Asia and the Pacific
United Nations Building, Rajdamnern Avenue, Bangkok, 10200, Thailand
Tel: + (662) 288 1471 ; Fax: + (662) 280 3829 ; E-mail: iosea@un.org



Print

カメ命拾い 3000キロの旅



中国・広東省で暮らす
食肉になることを地元の
漁民に教われ、海に返
されたワミガメが4月中旬
旬、小笠原諸島(東京府
小笠原村)の父島に上陸
し、産卵した。NPO法
人エバーラストティンブ
ネイチャー(本部・横浜
市)が運営する小笠原諸
群センターが、カメの印
鑑に書かれた地名を日々付
きもとに確認した。広東
省とは直線距離で約1千
キロ離れており、カメを飲
った地魚の祝文歌さん
(左)は「カメが日本を
訪れる」として喜びをか
ついでに表現している。

中国で食用寸前、僧に救われ



中国の新聞、年次総報が1月に刊行されたワミガメの
写真・提供・金平順 (中国のニュースサイト)

同センターの山口義
雄社長によると、メスの
アオウミガメで、甲羅の
成長は約5割、体重は一
キロあまり、父島・二冠
島の砂浜には日没、上
陸した、翌日も同じ場所
に上陸したが、砂が少な
く産卵できない状態だ
ためセンターの職員三
浦がワミガメを助けて海
にも帰したという記事が
掲載されていた。

父島に無事上陸、守られ産卵



●小笠原・父島に上陸した
ワミガメ。甲羅に彫られた
文字が中国で捕らられた
ものと一致した●甲羅に書か
れていた文字=いずれもN
PO法人エバーラストティン
ブ・ネイチャー提供



ワミガメは、中国の海地
域「広東省」という名
ある海産物とされているが、
ワミガメを助けて海
にも帰したという記事が
掲載されていた。

取り、地をむくかき
甲羅に彫って産卵に放
した。

この二
加吉若
遺族
六の鳥
野田一
た一人
らみ、
し、当
春の元
其れを
がわつ
法務省
で裁判
されな
清く、
正勝と
東京地
目のマ
ミル、
た別、
を、
ーり、
は、
が、
る、
業、

カメ命拾い 3000キロの旅

中国・広東省で発見、食用になることを懸念
 の標記に載り、海に放されたウミガメが今年中、小笠原諸島(東京都小笠原村)の父島に上陸し、産卵した。NPO法人エバーラスティング・ネイチャー(本部・横浜)が調査する小笠原諸島で、ウミガメの甲羅に書かれた場所や日付を元に確認した。先述の標記は直線距離で約1500キロ離れており、カメを救った厄僧の釈文観さん(62)は「カメは日本に無事着いたことが分かった。15、16日あたりで100キロは歩いた」と喜ぶ。



中国で食用寸前、僧に救われ

同センターの山口真希(小笠原)では、アオウミガメの産卵の調査にアオウミガメで、甲羅の標記は約1500キロ離れた小笠原に上陸した。翌日も同じ場所へ上陸したが、砂が少なすぎたため産卵できなかった。北南道大大学院に留学中のためセンターの調査で、人助けに感謝した。住僧の面を産んだ。



中国の新陸半島で発見されたウミガメの産卵現場。産卵後、産卵場が一月に閉鎖されたウミガメの産卵現場。産卵後、産卵場が一月に閉鎖されたウミガメの産卵現場。

父島に無事上陸、守られ産卵

中国の現地産卵場では、今年1月中旬、広東省の現地に産卵場と見られる場所がある。ウミガメを助けて海に放した。産卵場を調査していた。



産卵場では、ウミガメを救助した。産卵場を調査していた。産卵場を調査していた。

●小笠原・父島に上陸したウミガメ。甲羅に彫られた文字が中国で彫られたものと一致した●甲羅に書かれていた文字「1998年11月15日」はエバーラスティング・ネイチャー提供



大分の二
 加害者
 遺族側
 大分県
 行市(200
 た一家り入
 らみ、徳
 月、徳
 し、徳
 者の元々
 状況を説明
 がわかった
 徳
 徳
 されたが
 徳
 正徳と徳

た。遺体の届はしな
た。なと昇明 供託
れをめぐる談合事件で、
福井県警は22日、県内に
性があるとして現物通
み切った。



入りのかばんを奪われ
た。

同紙によると、商人が
ウミガメをストラウに
売ろうとしているのを知
った僧侶が45000元
(約1万2千円)で買い
取り、地名も目付などを
甲羅に記して翌日海に放
した。

朝日新聞が任さんに関
い合わせもらったところ
ろ、カメを救ったのは尼
僧の釈さんと分かった。
寺関係者の話では、同寺
はウミガメを何頭も救っ
てきたが、今回は特別に
大きく、みなお金を集
めて買い取り、寺で一晩
保護したらえ、海に返し
た。放流してもウミガメ
は何回か岸に戻ってきた
が、やがて海に消えた。
放流地の港では、数百人
の群衆が沖へ向からカメ
を見守り、お祭り騒ぎだ
ったという。

山口さんは中国本土
で放されたウミガメが小
笠原まで泳いできたこと
自体非常に珍しい。しほ
らくセンター内で保護し
てきたに産卵を見守り、
8月上旬をめどに海に返
したいと話している。

中国で命拾い、 日本で産卵

海ガメはるばる3000キロ

「食用」寸前僧侶助ける

中国・広東省で危うく食用になるところを地元の僧侶に救
われ、海に返されたウミガメが今月中旬、小笠原諸島(東京
郡小笠原村)の父島に上陸し、産卵した。NPO法人エパー
ラステイング・ネオナター(本部・横浜市)が運営する小笠
原海洋センターが、カメの甲羅に書かれた地名も目付をもと
に確認した。放流地とは直線距離で約3千キロ離れており、カ
メを救った僧侶の釈さん(82)は「カメが日本で無事とい
ることが分かって、とてもうれしい」と話している。

(山本智之)

同センターの山口真名
美所長によると、メスの
アオウミガメで、甲羅の
長さは約90センチ、体重は1
20キログラム。父島・二見
湾内の砂浜に1日夜、上
陸した。翌日も同じ場所
に上陸したが、砂が少な
く産卵できずに戻ったた
ため保護したところ、16
日に7個の卵を産んだ。

小笠原では、アオウミ
ガメが漁業の対象になっ
ているが、カメ漁師に捕
まることもなかった。

甲羅には「広東」「普
羅」「徐聞」などの漢
字が赤く彫り込まれてい
た。山口さんは、知人で
北海道大大学院に留学中
の中国人女性、任麗(82)と
人(82)に相談した。任さ
んがインターネットで調
べたところ、中国の現地
紙「羊城晚報」が今年1



●「羊城晚報」が報じたウミガメ1機、産卵場(中国のニエトウサイト)
●小笠原、父島に上陸したウミガメ。甲羅に彫られた文字が中国で報じら
れたものと一致した。NPO法人エパーラステイング・ネオナター提供

生き埋め殺人、死刑

大阪地裁 22歳主犯格に判決

判決によると、小林被
告は友人で大阪府民。3
年たった佐田(22)は
殺人罪などで公判中。ら
7被告と共謀。昨年8月

し、実行した。その後、
産産物集積場へ連れ
て行き、当日に鎌倉入
野20日に若土さんそ
れ生き埋めにして殺害

はのなつが眠るり集積

た。遺体の届はしな
た。なと昇明 供託
れをめぐる談合事件で、
福井県警は22日、県内に
性があるとして現物通
み切った。

だ。選挙の話はしたが、
た。なと井明 供託

れをめぐる数回事件、
福井真書は翌日、県内に

性があるときと捜査に臨
む切った。

時ころ、同市榎田町の
路上で、専門学校生の

入りのかばんを奪われ
た。

中国で命拾い、 日本で産卵

海ガメはるばる3000キロ

「食用」寸前僧侶助ける

中国・広東省で危く食用になることを地元の僧に救われ、海に返されたウミガメが今月中旬、小笠原諸島（東京都小笠原村）の父島に上陸し、産卵した。NPO法人エバーラステイタ・ネイチャー（本部・横浜市）が運営する小笠原海岸センターが、カメの甲羅に書かれた地名や日付をもとに確認した。放流地とは直線距離で約3千キロ離れており、カメを救った尾崎の釈文蔵さん（82）は「カメが日本で無事であることが分かって、とてもうれしい」と語っている。

（山本智之）



- ①『羊城晚報』が報じたウミガメ1機供、食卓へ（中国のニュースサイト）
- ②小笠原父島に上陸したウミガメ、甲羅に彫られた文字が中国で報じられたものと一致した（NPO法人エバーラステイタ・ネイチャー提供）



同センターの山口真名美所長によると、メスのアオウミガメで、甲羅の長さは約90センチ、体重は120.20キログラム。父島・一見湾内の砂浜に1日一夜、上陸した。翌日も同じ場所を上陸したが、砂が少なく産卵できない状態だったため保護したところ、18日に7個の卵を産んだ。

小笠原では、アオウミガメが漁業の対象になっているが、カメ漁師に捕まることもなかった。

甲羅には「広東」「普寧」「徐聞」などの漢字が赤く彫り込まれていた。山口さんは、知人で北海道大学院に留学中の中国人大学生、任敏儀さんに82に相談した。任さんがインターネットで調べたところ、中国の現地紙『羊城晚報』が今年1

月中旬、広東省徐聞県にある普寧庵という寺の僧侶がウミガメを助けて海にもどしたという記事を掲載していた。

同紙によると、商人がウミガメをレストランに売ろうとしているのを知った僧侶が4500元（約1万5千円）で買い取り、地名や日付などを甲羅に記して翌日海に放した。

朝日新聞が任さんに問い合わせてもらったところ、カメを救ったのは尾崎の釈さんと分かった。寺関係者の話では、同寺はウミガメを何頭も救ってきたが、今回は特別に大きく、みなお金を集めて買い取り、寺で一晩保護したら、海に返した。放流してもウミガメは何回か岸に戻ってきたが、やがて海に消えた。放流地の港では、数百年の昔から沖へ向かうカメを見守り、お祭りを催していたという。

山口さんは「中国本土で放されたウミガメが小笠原まで泳いできたこと自体、非常に珍しい。しばらくセンター内で保護し、さらに産卵を見守り、8月上旬をめどに海に返したい」と話している。

生き埋め殺人、死刑

大阪地裁 22歳主犯格に判決

判決によると、小林被告は友人で大阪府茨木市に年だった広畑賢二（22）を殺人罪などで公判中止ら7被告と共に、昨年8月

し、実行した。その後、産婦人科薬物集積場へ連れて行き、当日に鎌倉至人、翌20日に若土きんをそれぞれ生き埋めにして殺害





東

徐

徐

東

廣

園

二〇〇〇年
十一月
廿九日

弟

子







